

# 令和6年度幼児教育研究協議会 概要

開催日 令和6年8月23日(金)  
会場 富山県民会館

## 1 伝達講習の概要

記録者 富山市立速星幼稚園 水岡 巴絵

### (1) 幼稚園教育に関わる法令

- ① 幼児期の教育は「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」(教育基本法第11条)
- ② 幼稚園は学校(学校教育法第1条)

### (2) 幼稚園教育の基本

#### ① 基本原則は「環境を通して行う教育」

ア 環境とは、物的環境、人的環境、時間・空間等

イ 幼稚園教育における環境とは、幼児を取り巻く全ての環境

- ・幼児が「やりたい」「やってみたい」と心を動かす環境を、保育者がいかにつくるかということころが、教育的価値を合わせて大切になる。

#### ② 幼児教育の基本に関して重視する事項

#### ③ 環境の構成

「幼児の主体性」と「保育者の意図」とをバランスよく絡ませていくことが大切である。

#### ④ 保育者の役割

ア 幼児の活動の理解者として

イ 共同作業・共鳴する者として

ウ 憧れを形成するモデルとして

エ 遊びの援助者として

オ 心のよりどころとして

### (3) 幼児理解に基づいた評価

幼児が今、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのかなどを捉え続けていく必要がある。

#### ① 評価の留意点

ア 幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるもの等を把握

イ 保育者の指導が適切であったかどうかを把握し、指導の改善に生かすこと

ウ 他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意

エ 妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進

### (4) 幼稚園教育において育みたい「資質・能力」「5領域」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」

### (5) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続について

### (6) 架け橋期のカリキュラムの開発について

#### ① 架け橋期のカリキュラムの考え方

#### ② モデル地域の取組(文部科学省幼保小の架け橋プログラム事業中間成果報告会資料より)

#### ③ 自治体との連携

#### ④ 家庭や地域との連携

## 2 研究発表の概要

発表者 黒部市立さくら幼稚園 朝倉 真美  
記録者 砺波市立太田認定こども園 鷲岡 徹

### (1) 協議主題

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

### (2) 研究の視点

- ① 幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の推進、連携・協働をどのように進めていけばよいか。
- ② 架け橋期のカリキュラムの開発・実施について、どのように進めていけばよいか。

### (3) 実践より明らかになったこと

- ① “小学校側も幼児について知りたいことがあるはず”という意識の下、幼稚園側からの一歩踏み込んだ働きかけが小学校との関係づくりの糸口となった。幼稚園と小学校間で現状を気軽に伝え合える継続的な関係をつくっていくことが、幼児教育と小学校教育の相互理解や具体的な連携・接続に向けた方法を導くことにつながっていく。お互いが無理なく実施できる内容を模索していくことがポイントになる。
- ② 年長児が、園だよりを小学校に届けたり、児童と直接関わったりしたことで、小学校を身近な存在に感じて期待や憧れの気持ちを芽生えさせるきっかけとなった。また、園だよりにより園児の心の動きや友達との関わり、保育者の援助を細かく記載したことで、小学校教員が幼児教育を理解する手立ての一つとなり、幼小接続に対する意識を向上させることにつながった。接続に向けた合同研修を通して、小学校区内の全ての幼児教育施設とともに接続に向けた取組を進めていく必要性について共通理解することもできた。

### (4) 指導助言事項 東部教育事務所 開井 千晴 指導主事

#### ① 【取組1】について

遊びを通した総合的な指導の下、遊びを通して学びを進める幼児の姿を家庭や地域、小学校に認識してもらうことが大切である。保育者が幼児の具体的な姿と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を関係付け、捉えた育ちの姿を園だより等に記載することで、小学校教員は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりとして幼稚園での遊びを通した学びの姿の理解を深めると考えられる。今までの取組を見直し、無理なく改善していくことが大切である。また、小学校教員が幼児教育で大切にされていることを視点として保育の様子を参観することも、幼児教育の理解を深める有効な手段となる。

#### ② 【取組2】について

知らない人や初めて会う人と交流することは困難が見込まれることから、園児と児童が顔見知りになっておくことは活動を円滑にすると期待される。小学校の施設や行事の見学、園だよりを年長児が届けに行くこと等の取組は、園児が小学校との関わりを深める上で効果的だった。既存の取組を見直し、できることを積み重ねたことが、生活科の学習で園児と児童と一緒に活動することや、幼稚園教員と小学校教員が互いの理解を深めたい思いをもつことにつながった。なお、幼小接続に関するアンケート結果は、小学校教員と共有し、全教職員で共通理解して幼小連携に取り組んでいくことが大切である。